

## 【vol.77】 リディアン♭7th スケールを使ってみる

どうも、大沼です。

今回は、以前ポジションを覚えた♭7th(リディアン・ドミナント)スケールの実践編です。

前にもお話ししましたが、メロディック、ハーモニックの両マイナースケール上に構築されるモードスケールの一部は、意外と使う機会があったりします。

特に、ギタリストなどの、リードプレイを行う事の多いパートは、ソロを任せられた時、進行の中に、ワケの分からないコードが1～2個出てきたりするのですが、主にそういう所で使う事になりますね。笑

これがまた憎たらしいことに、範囲も短く、数も少ないんですが、美味しい響きの箇所だったりするので、そこでサラッと弾けるとかっこいいんですよ。

そういった、対応力のアップも兼ねて、この機会に変なスケールも覚えてしまいましょう。

ではまず、vol.71 で、スケールポジションやインターバルなど、基本的な部分は学びましたが、もう一度、軽く復習しておきましょう。

前回に引き続き、key=Bm を想定して、B メロディックマイナーを基準に見ていきます。

### ※B メロディックマイナースケールのダイアトニックコードとモードスケール

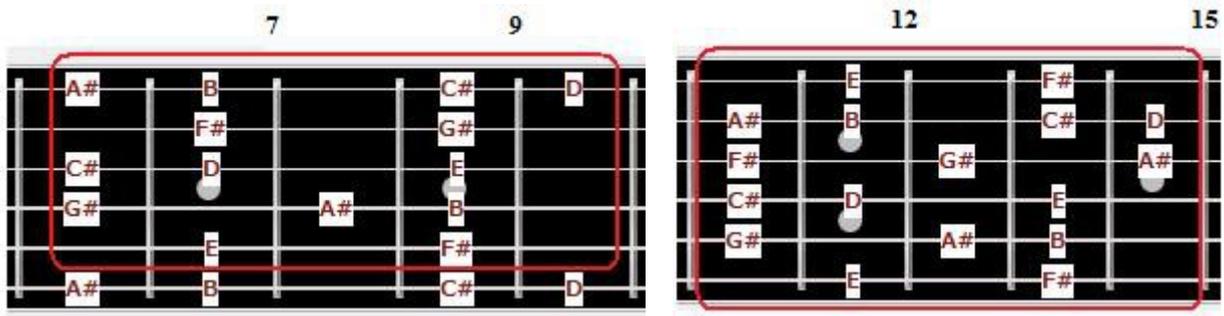
I mM7	BmM7	B メロディックマイナー
II m7	C#m7	C#ドリアン♭2nd
♭ III augM7	Daug M7	D リディアン#5th(リディアン・オーギュメント)
<b>IV 7</b>	<b>E7</b>	<b>E リディアン♭7th(リディアン・ドミナント)</b>
V 7	F#7	F#ミクソリディアン♭6th
VI m7(♭5)	G#m7(♭5)	G#エオリアン♭5th(ロクリアン#2)
VII m7(♭5) or VII7(♭5)	A#m7(♭5) or A#7(♭5)	A#オルタード・ドミナント

このスケールは、モノ自体はメロディックマイナーの4度の音をトニックにして弾き始めたものと同じです。通常、上記の2種類のどちらかの名前で呼ばれますね。

構造としては、スケール名の通りで、リディアンスケールの7度(M7th)を♭させたスケールで、インターバルは、tonic、M2nd、M3rd、#4th(#11th)、P5th、M6th、m7th(♭7th)となっていました。

今回の例ではBメロディックマイナーが基準なので、E音をトニックに重要ポジションを見ておきましょう。

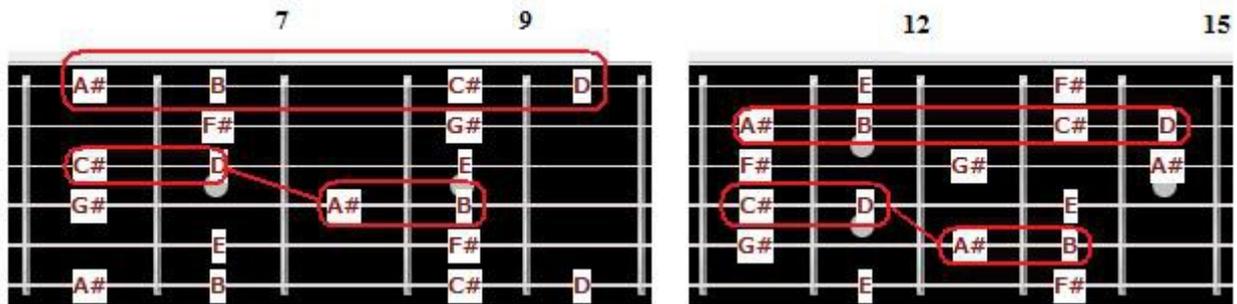
・Eリディアント7thスケール、重要ポジション(5弦&6弦トニック)



これらのポジションの練習の仕方については、vol.71の方ですでにやっているのので、そちらを参考にしてください。

このスケールのポイントは、リディアンの重要な音である4度(#4th)の周辺と、ドミナント系スケールの重要な音であるm7th(b7th)の周辺ですね。

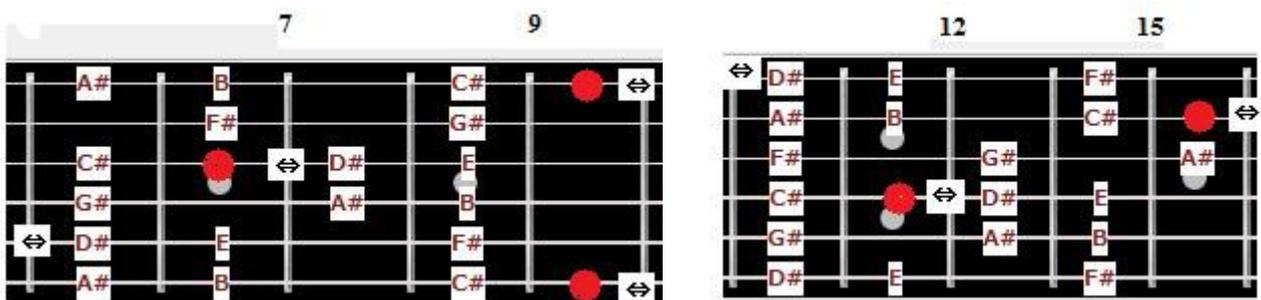
この『#4、P5、M6、m7』の4音の並びが特徴的なので、ここを意識すると、他との違いが見えてきて、スケールが把握しやすくなるでしょう。



例えば、以前も確認しましたが、構造の近いスケールとして、Eリディアンスケールと比べると、音の配置にこの様な違いが見えます。

(※リディアンとリディアント7thの場合は7度(M7thとm7th)の違い)

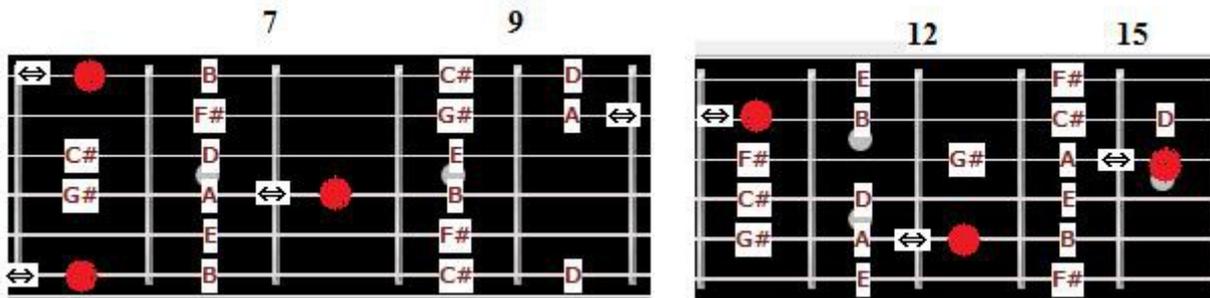
・Eリディアンスケールとの比較(5弦&6弦トニック重要ポジション)



上下の図で7度の位置を比較してみましょう。(※赤丸がリディアン♭7thのm7th音)

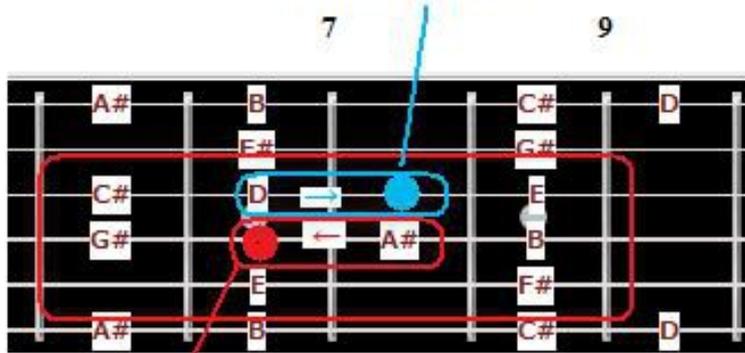
後は、これも以前見ましたが、ミクソリディアンスケールとリディアン♭7thスケールも、4度の音が違う(P4thと♯4th)だけですね。

・Eミクソリディアンスケールとの比較(5弦&6弦トニック重要ポジション)



これらの関係性をリディアン♭7thのポジションを基準に、1オクターブの範囲で見るとこんな感じです。

・リディアン♭7thと、リディアン、ミクソリディアンの関係性  
リディアン♭7thのm7thをM7thへ→リディアン



リディアン♭7thの♯4thをP4thへ→ミクソリディアン

これまでも、こういった、複数のスケール間での関係性を見てきましたが、こういった事がすぐにわかる様になると、ポジションを覚えたり、構造を把握するスピードが速くなります。

さて、では復習はこのくらいにして、実際の使い方に入っていきます。

“何かしらのスケールを使う場面”として、最初に確認しなくてはならないのは、『コード(進行)がどうなっているのか?』ですね。

今回のリディアン♭7thスケールで言うと、先のメロディックマイナーのダイアトニック一覧にある様に、『ドミナント7thコード』に対応しているスケールです。

### ※Bメロディックマイナースケールのダイアトニックコードとモードスケール

I mM7	BmM7	Bメロディックマイナー
II m7	C#m7	C#ドリアン♭2nd
♭III augM7	Daug M7	Dリディアン#5th(リディアン・オーギュメント)
<b>IV 7</b>	<b>E7</b>	Eリディアン♭7th(リディアン・ドミナント)
V 7	F#7	F#ミクソリディアン♭6th
VI m7(♭5)	G#m7(♭5)	G#エオリアン♭5th(ロクリアン♯2)
VII m7(♭5) or VII7(♭5)	A#m7(♭5) or A#7(♭5)	A#オルタード・ドミナント

これを見ての通り、トナルセンター(キーセンター)に対しての、IV 7(4度7th)に当たるコードの上などでリディアン♭7thを使ったりします。

(※上の表のkey=Bmで言うならば、B音に対しての4度であるE音をルートにしたE7上。他にもkey=Cならば、C音に対しての4度であるF音をルートにした、F7上で使うなど)

本来、メジャーキーの4度のコードはIV M7ですし、マイナーキーの4度のコードはIV m7なので、アレンジによってIV 7が出てきている場合、そこではリディアン♭7thを使う可能性がある、という事ですね。

この『リディアン♭7th(リディアン・ドミナント)スケール』ですが、「リディアン」と言う名前が付いているので、そちらに関係があるのか?とも感じますが、実際の活用を含めて考えると『M3rdとm7th(♭7th)を含む、ドミナント系のスケール』になります。

なので、スケールとしては、どちらかと言えば『ミクソリディアンの4度を半音上げたもの』として見ると、ドミナント7thコード(X7)との関係性が見えてくるでしょう。

このミクソリディアンの観点から見てみると、使う場面としては、先ほどのIV 7上の他に、『トニックコードとしてのドミナント7th』の上で使う事も考えられますね。

要するに『X7のコードをI 7と見なして、その上でリディアン♭7thを弾く』と言う話です。

この、X7をI 7のように見る場合は、そのX7が長く続いたり、X7一発の進行の場合に、そう解釈する事になります。

ちなみに、少し話は変わりますが、純粹に「ドミナント7thコード」の例として最初に話に上がるのが、5度7th(V7)のコードですよね。

で、このコードが、key に対しての調性をはっきりした進行の中で出てきた場合(要するに、その key の I (1 度) に対する純粋な 5 度である V 7。key=C なら G7)、その V 7 の上でリディアン ♭7th スケールを使う事はあまりありません。

(※絶対に使えないと言うわけでもないですが、普通は他のスケールをチョイスします)

リディアン ♭7th スケールに関して言えば、先ほど説明した、IV 7 の上で使う、とか、I 7 と見なしてその上で使う、と言ったものの他にも、「何時このスケールを使うのか？」と言う分類が、実は明確にあったりします。

ですが、いきなりそれらを全部覚えるのも大変なので、まず今回は、IV 7 と I 7 上で使う場合の譜例を参考に見ていきましょう。

ではまず最初に、リディアン ♭7th に近いスケールとして、ミクソリディアンと響きの違いを比べたフレーズを弾いてみます。

以下は、それぞれの違いである、4 度(P4th と #4th)を意識して、両者を交互に弾いた譜例です。(※どちらにとっても重要な音である、7 度(m7th)の音も強調しています)

いつもの事ですが、出来る限り、バックにコードを鳴らしながら弾いてみて下さい。

### 譜例、ミクソリディアンスケールを感じるフレーズ

### 譜例、リディアン ♭7th スケールを感じるフレーズ

リディアン ♭7th もミクソリディアンも、どちらもドミナント 7th コードに対するスケールですが、1 音の違いでかなり雰囲気が変わりますね。

さて、似ているスケールそれぞれの響きの違いを確認したところで、次に、今回の題材である、I 7とIV 7の上で、それぞれのリディアン♭7thスケールを使ってみる、と言う事をやってみましょう。

I 7とIV 7ですが、これらのコードが出てくるもので馴染みがあるのは、ブルースの12小節、3コード(I 7、IV 7、V 7)のフォーマットだと思います。

このブルースの進行を元に、『I 7を4小節、IV 7を4小節』と言うループを作って、その上でスケールを弾いていきます。

keyはこれまでE音トニックでリディアン♭7thスケールを見てきたので、key=Bで行きます。この場合、I 7がB7、IV 7がE7になりますね。

今回はリディアン♭7thスケールの練習なので、両者のドミナント7thのコードに対して、『Bリディアン♭7th ⇔ Eリディアン♭7th』と切り替えていきます。

B音トニックのスケールポジションは、これまでE音で確認してきたものを、トニックをB音にずらして弾くだけです。

バックイングのコードヴォイシングは好きなものを選んでもらって構いませんが、譜例では、便宜的に、以下の様に表記しました。

### 譜例、key=B、I 7-IV 7、バックイングサンプル

♩ = 60

(♩ =  $\overset{3}{\text{♩}}$ )

S-Gt

mf

TAB

7 8 7 7

7 8 7 7

5 7 6 7

5 7 6 7

この4小節×2くらいのループの上で練習します。

テンポはBPM60～程度、譜例は16分音符のシャッフルを想定しているので、リズムに気を付けて下さい。

リディアン♭7thとの響きの違いを分かりやすくする為に、最初の4小節は、key=Bのブルース的な解釈のフレーズにしてみました。

使っているスケールとしては、ブルーススケール、ペンタトニック(メジャー&マイナー)、ミクソリディアンの2～4種類(を混ぜている様な感じ)です。

B7上では、BブルーススケールやBミクソリディアン、E7上では、Bマイナーペンタ～Eミクソリディアンの様にスケールを想定して弾いています。

通常、上記の様なコード進行が提示された場合、普通の感覚で演奏するならば、こういったスケールをチョイスする事になるでしょう。

そして後半の4小節が、それぞれのコードのルート(B、E)をトニックにしたリディアン♭7thのフレーズになっています。

スケールとしては構成音がほぼ同じですが、♯4th周りが違うだけで、響きに大きな変化が感じられるはずなので、そういった点を意識しながら弾いてみてください。

それでは、譜例は以下になります。

#### 譜例、key=B、I 7-IV 7

The image displays a guitar score for the key of B major, specifically the I 7-IV 7 progression. It consists of two systems of music, each with a treble clef staff and a guitar TAB staff. The first system covers measures 9 and 10, featuring a B7 chord. The second system covers measures 11 and 12, featuring an E7 chord. The TAB includes fret numbers and a 3/4 time signature change in measure 10.

前半4小節と後半4小節の響きの違いを感じ取れましたでしょうか？

リディアン $\flat$ 7thを使っているところは、意図的に $\sharp$ 4th( $\sharp$ 11th)と $\flat$ 7th(m7th)を多めに鳴らしているのです、その辺りを弾くと、ダークと言うか怪しさと言うか、ミクソリディアン等よりは重めの響きになるのが分かるかと思います。

これらを参考に、自分なりにソロを作って練習してみてください。

後、ちょっとした知識として、『そのコードの上で、リディアン $\flat$ 7thを使ってほしい(もしくはアレンジとしてそのスケールを使っている)』と言う事を表す表記として、『X7( $\sharp$ 11)』みたいにコードを書く時があります。(※あまり出てきませんが)

もしくは、場合によっては、X7( $\flat$ 5)のように表記されている場合もありますね。(11thと $\flat$ 5thはギターでは異名同音)

この辺り、人によって、書き方が変わってきたりするのですが、X7の上にリディアン $\flat$ 7thのテンション(9th、 $\sharp$ 11th、13thなど、特に $\sharp$ 11th)が乗っているかどうか？に、気を配っておきましょう。

さて、では、今回は以上になります。

今回は、楽曲の中でリディアン♭7thスケールが使える、他のコード進行のパターンを学んでいきたいと思います。

ありがとうございました。

大沼